

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 1 日現在

機関番号：32612

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07172

研究課題名(和文) 能をめぐる国際交流 フランス語圏を中心に

研究課題名(英文) International exchange through Noh between Japan and French-speaking countries

研究代表者

西野 絢子(NISHINO, AYAKO)

慶應義塾大学・文学部(三田)・助教

研究者番号：60645828

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は能をめぐる国際交流の姿を、主に日本とフランス語圏との関係に注目して具体的に解明した。ベルギー象徴派劇詩人メーテルランクの作品を翻案した新作能、フランス象徴派劇詩人クローデルが能に触発されて創作したオラトリオから着想を得て創作された新作能、及びクローデル作品を能劇化した創作能を分析し、能という舞台芸術が持つ、言葉を越えた普遍性を浮き彫りにした。また、クローデルを介した能が異文化間で共有できる世界遺産となっていることが確認され、能をめぐる国際交流の中でのクローデルの重要性が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This research concretely elucidated the form that international exchanges over Noh take, in particular the relation between Japan and the French-speaking regions of the world in this matter. I analyzed new Noh works adapting works of Belgium Symbolic theater related poet Maurice Maeterlinck as well as the new Noh inspired by "oratorio dramatique" by French Symbolic theater related poet Claudel, which theater piece itself received inspiration from Noh. I analyzed also Claudel's work that has been rendered as a piece a Noh theater. This study, closely investigating these adaptations, put into relief the universality beyond words that is implicit in the performing art of Noh.

Through Claudel it can be affirmed that Noh, which is recognized under the UN's World Heritage designation, can be shared among different cultures. The importance of Claudel in the international exchange surrounding Noh must also not be overlooked.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス文学 比較文学 クローデル メーテルランク 新作能 日仏演劇交流 能楽 楽劇

## 1. 研究開始当初の背景

①日本の楽劇、能は19世紀末から西洋人を魅了し始めたが、単なるエキゾチスムを超えた関心を抱いたイエーツ、クローデル、プレヒトなどの芸術家たちは、能を自らの創作に取り入れ、戯曲を作成した。これは人口に膾炙しているが、20世紀以降の日本では、逆にこれらの作品に想を得た新作能が生まれている、ということはいまだあまり知られていない。

いわば能をみつめる東西の視線が交差し地球を一周したのであるが、このような往復運動は、能を含めた演劇に、普遍性と無限の可能性のあることを示唆している。日本と西洋におけるこれらの新作能の上演は、画期的な国際交流の場となっている。演劇の国際交流は两大戦間期にその基盤が作られたが、このような往復運動は、特殊なケースとして紹介し、新たな研究対象とすべきであると考え、本研究の着想に至った。

②博士論文では、クローデルが能をはじめとする歌舞伎、文楽など日本の伝統演劇から受けた影響について、その解釈の仕方と翻案・創作の方法を、西洋における能の受容史に位置づけて明らかにした。クローデルは「能とは何者かの到来」という、能の本質を適格に把握した明確な言葉を残した。これは1957年に始まるフランス初の能の海外公演のプログラムや劇評をはじめ、その後も多くの人々に引用されている。しかし能の海外公演、特にフランスにおける研究は十分ではなく、単なる記録以上の考察が求められている。上記のような新作能の研究も含めて検討することで、今後の交流を促進させる必要性を感じたことも本研究を考えるに至った背景にある。

③フランスのクローデル研究では、クローデルが何かから受けた影響についての研究は進んでいるが、逆に彼が与えた影響については、その複雑さからあまり進められていない。しかし本研究では、クローデルが日本に与えた影響、またはクローデルの日本受容の問題の一部を明らかにすることができると考えた。

## 2. 研究の目的

①主にクローデルが能を独自の視線で解釈して創作したオラトリオ『火刑台上のジャンヌ・ダルク』(1934年)に想を得て作られた新作能『ジャンヌ・ダルク』(2012年、西野春雄作詞、喜多流能楽師、狩野琇鵬作曲・演出による上演)をとりあげ、そのテキスト、演出方法、受容の様子(劇評、新聞等)を分析し、東西の輪をつなげた能が生み出す国際交流の姿を明らかにすることをまず目的とした。

②上記作品をまずテキストの文化・文学・演劇的分析を中心に行い、次に、上演・演出について、映像資料や役者や関係者へのインタビュー、劇評をもとに明らかにすることも目的とした。オルレアン、パリ、エクサンプロ

バンスで上演されたことより、地方都市での受容との差異についても明らかにすることを意図した。

③能をめぐる国際交流の解明は、メーテルランクの『タンタジールの死』から想を得て高浜虚子が作劇した能『鐵門』と合わせて考えることも有効である。『タンタジールの死』はメーテルランクが能を意識して創作した作品ではないが、象徴派詩人の文学世界と能の演劇形式が融合したこの新作能から、国境を越えた文学の普遍的テーマ、世界文学としての能の可能性を明らかにしたいと考え、研究対象とした。

④クローデル作品を翻案した新作能のみならず、クローデル作品をもとにアレンジした新作能・創作能は日仏両国で上演されている。いくつかのケースを分析し、日本におけるクローデル受容の問題に接続することも目的の一つとした。

## 3. 研究の方法

①クローデルの『火刑台上のジャンヌ・ダルク』がどのように新作能『ジャンヌ・ダルク』に変奏されたのかを明らかにするために、まず新作能の台本作成者に連絡をとり、台本と台本の仏訳を見せて頂き、2012年のフランス上演時の資料(パリ上演のDVD及びフランスの新聞や雑誌に掲載された劇評集)、2013年日本初演時の資料(熊本上演のDVD)を参照させて頂くことができた。まず、ジャンヌ・ダルクというテーマの受容を芸術の歴史の中で概観した後、クローデルの『火刑台上のジャンヌ・ダルク』にみられる能の影響を明らかにした上で、新作能『ジャンヌ・ダルク』の劇構造や登場人物の役割について、クローデル作品と比較しながら分析した。最終場面で「鎮魂」という両者に共通するテーマを見出し、その部分のテキストを翻訳に注目しながら集中的に分析した。

②上演についてはDVDを参照し、劇評はフランスで収集された資料を参考にしたが、それだけではわからない部分を解明するため、実際にジャンヌ・ダルクの役を演じた能楽師と、能本作成者にインタビューを行った。上演の工夫やフランス人観客の反応、3都市の印象の違い、新作能と従来の能の上演方法の違いなどについて質問した。また、クローデルの能理解についても、能役者・能研究者の立場からの印象について話して頂いた。渡仏しての資料収集、上演に関わったフランス人俳優へのインタビューは諸事情で実現しなかったが、今後の機会を考えている。

③クローデル以外のフランス語圏の作品の能劇化の様相を探るため、メーテルランクの『タンタジールの死』を高浜虚子が翻案した『鐵門』に注目した。これが初演されたのは1916年のことであるが、その100周年を記念した復曲試演が2016年京都で行われた。これを観劇し、前者がどのように新作能に作り変えられたのかを、劇構造や登場人物の役割、

結末について比較分析し、両者に通底するものと相反するものを明らかにした。両作家における各作品の位置付けや意義も考察した。④クローデル作品の能劇化はいくつかのケースがあるので個別に検討し、総合的に分析した。まずは、1923年の日本でクローデル自身が書き歌舞伎形式で上演された『女と影』が、1968年（クローデル生誕100周年）に同名の能に創り変えられたケースを考察した。この上演に関する資料は、古本屋で入手することもできたし（台本、パンフレット）、この能を観劇した知人から印象を聴くこともできた。また能楽関係の資料を調査し劇評も入手できた。21世紀に入ると、演出家の渡邊守章が、クローデルの詩や戯曲をコラージュして創作した新作能が2曲誕生し、いずれも日仏両国で上演されている（『内濠十二景あるいは二重の影』、『薔薇の名一長谷寺の牡丹』）。これらの作品は研究代表者自身が観劇した時の資料（台本、パンフレット）と、知人から頂いた映像資料（DVD）、フランスでの劇評を参照した。いずれの作品もテキストを分析し（クローデル作品の原文および翻訳との比較）、劇構造や登場人物の役割を明らかにし、比較検討を行った。

#### 4. 研究成果

①クローデルを介した能の往復運動に注目して得られた成果は、まず日本クローデル研究会誌にまとめた（5、雑誌論文、②）。クローデルが能に想を得て書いた『火刑台上のジャンヌ・ダルク』は、救国のヒロイン・ジャンヌの地上での悲劇を天上での聖なるドラマに変貌させて賛美する。新作能でも地上の悲劇は再現されるが、結末は天へ上昇していくジャンヌの魂を表現している。両者とも能特有の「鎮魂」というテーマに関わり、上演自体が劇場における儀式の成立と考えられ、そこに立ち会う観客の役割も大きい。また鎮魂という共通テーマが現れる最終場面のテキスト分析を行った結果、翻訳という作業が持つ、生産的な側面を発見することもできた。クローデルのテキストの日本語訳を参照して作られた能台本を、更にフランス語に翻訳するとき、クローデルのフランス語と能台本の仏訳の間に飛躍が生まれ、後者がより力強い表現に生まれ変わっていた。能をめぐる国際交流の解明は、このような発見の機会にもなった。

②新作能『ジャンヌ・ダルク』のフランスでの受容について、能本作成者と能役者に対して行ったインタビューの成果は、研究代表者が、博士論文執筆時に指導を受けたパリ第4大学のディディエ・アレクサンドル教授と共に企画した、国際シンポジウム『ポール・クローデルー日本：交叉する視線』（慶應義塾大学三田キャンパス）において、ラウンドテ

ーブルの形で発表した（5、学会発表、③）。研究代表者はアレクサンドル教授の質問を和訳し、能楽関係者の答えを仏訳し、総合的に考察したうえで両言語の配布資料を作成した。演出の工夫のみによらず、言葉の壁を超えた、劇場におけるジャンヌの魂の平和を祈る共同体が成立したことが証明された。この成果はフランスのクローデル協会誌への掲載がきまっている（2019年）。

③メーテルランク作品の能劇化についての考察成果は学内の紀要に発表した（5、雑誌論文、①）『タンタジールの死』はどんなに幼い者の命さえも容赦なく奪う死の残酷さ、運命に抵抗できない人間の無力な姿が描かれ、不条理とペシミズムに満ちている。新作能『鐵門』は同じく死の不条理、愛する者との別離の苦しみを描きながらも、結末には魂の救いが仄めかされている。能特有の「鎮魂」のテーマにより観客の心は平安を得るのだ。死という普遍的な悲劇に、救いの余地を与えるのが能という演劇表現の強みであることが明らかになった。

④クローデル作品の能劇化という問題は、世界を舞台に活躍した詩人大使の各国での受容を考える時、日本における受容の唯一無二の特長として強調する必要があるため、日仏両言語で発表した。まず通史的な分析と劇作術についての考察を、日本クローデル研究会において日本語の口頭発表を行った（5、学会発表、①）。さらに、創作能『内堀十二景あるいは二重の影』について、素材となっているテキストの分析を充実させて、学内紀要に日本語論文の形で発表した（5、雑誌論文、③）。また、国際シンポジウムでは、フランス語での口頭発表を行い、最近フランスで出版された、クローデルの愛人との書簡を手掛かりに、彼の能体験における、『羽衣』の受容性に注目した後で、渡邊守章が創作した2作の新作能が、クローデルの解釈した能と重なり合う点を指摘し、またそこにも『羽衣』の天使の姿が垣間見られる点も指摘した（5、学会発表、②）。これは学内紀要に掲載する予定である（日吉紀要67号）。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

①西野絢子、『『タンタジールの死』から『鐵門』へー虚子によるメーテルランク翻案能一』、『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』、64号、2017年、117-136頁、査読無。

②西野絢子、『『火刑台上のジャンヌ・ダルク』から新作能『ジャンヌ・ダルク』へ』、『L'oiseau Noir 日本クローデル研究会』、19号、2017年、36-72頁、査読無。

③西野絢子、「クローデル作品の能劇化」、  
『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』、65号、2017年、79-100頁、査読無。

〔学会発表〕(計3件)

① Ayako Nishino, « Claudel et le nô : aller-retour entre la France et le Japon », Paul Claudel -Japon : regards croisés (国際学会), 2018年

② Ayako Nishino, Didier Alexandre, Haruo Nishino, Ryoichi Kano, « Table ronde autour du nô : Claudel et le nouveau nô "Jeanne d'Arc" », Paul Claudel -Japon : regards croisés (国際学会), 2018年

③西野絢子、「日本におけるクローデル受容、新作能を中心に」、日本クローデル研究会、2017年

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西野 絢子(NISHINO, Ayako)

慶應義塾大学・文学部・助教

研究者番号：60645828

(2) 研究分担者  
( )

研究者番号：

(3) 連携研究者  
( )

研究者番号：

(4) 研究協力者  
( )